

Devéria, Achille. *Costumes historiques de ville ou de théâtre et travestissements*. Paris, Goupil et Vibert, 1831. 125 plates (litho. col.) 54.0×34.7 cm <383.1-D>

Hiler p. 236 Colas 859

古代・中世から19世紀までの各国の衣装を描いた、手彩色石版画125枚からなる作品集である。歴史上の衣装を、その時代の資料を基にして描きあげたもので、舞台衣装や仮装衣装あるいは街の衣装のデザインのヒントとして活用されることを目的に出版されている。したがって作者自身の解釈や意匠が加わってくるのは当然であり、純粹の歴史記録の版画とは異なり、実証性は二の次になっている。ポーズのつけ方やデッサンといった肖像画の技法において優れているだけでなく、石版の技術も実に見事で細部まで丹念に描出されており、衣服の紋様や色、装身具などの考察は綿密で、質の高い作品になっている。

描かれる衣装は、世人の好む芝居やオペラの題材によって時代が偏ることは当然であり、たとえばイギリスならばチューダー王朝時代に、イタリアやスペインならば16世紀に集中するという具合である。プレートのは大半はフランスの歴史衣装で占められており、17、18世紀のブルボン王朝の宮廷服を中心に、中世やルネサンス期が描かれている。これらのヨーロッパ衣装の他に、異国の衣装としてインドや中国、アラビアが加わり、さらに芝居や仮装によく登場する古代ギリシャ人やアマゾンや妖精などもとりあげてある。なお最後の4枚は当時の有名スターたちのポートレートになっており、イタリア生まれのダンサー、タグリオニ (Marie Taglioni)、女優ラシェル (Rachel)、歌姫ファルコン (Falcon)、オーストリア生まれのダンサー、エルスレ (Fanny Elssler) が、それぞれ舞台衣装をまとうて描かれている。

19世紀において歴史服に光が当てられる場合は、やはり演劇やバレエやオペラの衣装デザインの参考画として、また仮装舞踏会の扮装の手がかりとなることを主要な目的としている。その点を踏まえてドゥヴェリアの作品集を見れば、実用と芸術性に富んだ衣装版画集と評価できるだろう。

ドゥヴェリア (1800—1857) はパリ生まれで石版画家として出発、最初は政治をテーマとしたが、後に肖像画に転じ当代一流の作家となる。石版をはじめ、水彩画、クレヨン画、デッサンなど作品は多い。当時の人気女優たちの肖像画集や、パリの女性たちをテーマにした作品集がある。弟のユジェヌ (Ugène, 1808—1865) は歴史画家として有名である。(辻)